

V. 教育現場との共同研究

V-1 研究の目的と方法

本節のねらい：教育現場との共同研究として行った JF 日本語教育スタンダードの試行の目的と方法についてその概略を簡潔に述べる。

キーワード：CEFR の能力記述文の利用、自己評価・ポートフォリオ評価の導入、現場実践者の反応

1. 目的

本章で報告する JF 日本語教育スタンダードの試行は、国際交流基金内の複数の教育現場との共同研究という形で進め、各講座の現状分析を行った後目標設定と評価を CEFR の枠組みで見直すとともに、CEFR の枠組みを日本語教育に適用しようとした場合どのような効果や課題があるかを探求することを目的とした。

共同研究の目的は、次の 2 つである。

- (1) 既存講座の現状分析を行い目標設定と評価を CEFR の枠組みで見直す一連の作業が、現場担当者の内省や対話の促進に効果があるかどうかを検証すること。
- (2) CEFR の枠組みを日本語教育に適用しようとした場合に、どのような効果や課題があるかを実証的に示すこと。

本研究の対象としたのは、浦和の国際交流基金日本語国際センターで行われている外国人日本語教師を対象とした海外日本語教師短期研修、国際交流基金ソウル日本文化センターの上級日本語講座、国際交流基金ケルン日本文化会館の初級日本語講座の 3 講座である。

2. 方法

CEFR の枠組みを日本語教育に適用するために、① CEFR の能力記述文を現場の目標記述に利用する、②自己評価・ポートフォリオ評価を導入するという、2 つの取り組みを行った。これらの取り組みに着手するにあたって、各現場の講座担当者と、これまでの豊富な実績・蓄積や現状の課題や制約事項を整理し、協議を重ね、各現場にあった共同研究

の目的や進め方を探りながら、実行に移していった。各現場の報告は、後続の現場ごとの報告で詳しく述べる。

共同研究の目的 (1) (2) の結果は、目標記述に利用された CEFR の能力記述文の傾向と学習者を対象とした自己評価チェックリストの結果を分析するとともに、担当講師を対象にして行った講座終了後の情報共有やふり返りのためのワークショップでの発言、質問紙調査による回答を参照しながら報告する。

2.1 CEFR の能力記述文の利用

CEFR の約 500 の例示的能力記述文を各現場の目標記述に活用した。各現場においては、これまでの講座担当者が見直し改善を繰り返してきたそれぞれの内部指標としての目標が存在する。これらの既存のコースの目標を、一般的な指標としての CEFR の例示的能力記述文と照らし合わせながら新しい目標記述として書き換えてコースデザインの見直しをした。具体的な作業手順は次のとおりである。

- (1) CEFR の例示的能力記述文 (約 500 項目) をデータベース化。
- (2) (1) のデータベースを使って当該講座の目標記述を行い、コースデザインを見直す。
- (3) 使用された能力記述文の確認と、講座担当者からの記述文に対するコメントを収集する。

2.2 自己評価・ポートフォリオ評価の導入

CEFR の約 500 の例示的能力記述文を各現場の目標記述に活用してコースデザインを行うとともに、学習者が自分の日本語能力をコースの事前・事後で自己評価するための「自己評価チェックリスト」を作成し、コースの事前・事後において学習者の自己評価を導入した。この「自己評価チェックリスト」に加え、can do で記述することが難しい異文化理解能力や学習能力などの育成を図るために、日本語・日本文化体験を記録するための「私の大切な体験」、言語学習の成果を収める「成果物ファイル」の 2 つを加えたものをポートフォリオと位置づけ、ポートフォリオ評価を導入した。各講座の事情によって、ポートフォリオ評価の導入範囲は若干異なるが、自己評価チェックリストによる事前・事後の自己評価はすべての講座で実施した。学習者に対しては、次のような手順で進めた。

・コースの開始時

- (1) 自己評価・ポートフォリオ評価についてのオリエンテーションを行いその目的や

意義を担当講師が説明する。

(2) 自己評価チェックリストを使った事前の自己評価を行う。

• **コース終了時**

(1) 自己評価チェックリストを使った事後の自己評価を行う。このとき、事前の自己評価チェックリストの結果は見ないで行う。

(2) 自己評価チェックリストやコース期間中に作成したポートフォリオを見ながら、自分自身の能力の伸びや学習体験について振り返る。クラス全体で振り返りが行える場合は、クラス全体でディスカッションする。

2.3 現場の実践者の反応

これら一連の作業が現場実践者の内省や対話の促進に効果があったかどうかということは、講座終了後、担当講師を対象にして行った情報共有や振り返りのためのワークショップでの発言や、質問紙調査による回答を参照することとするとすでに述べた。しかし、本研究が対象とした3講座のうち現在コースが終了しているのは、日本語国際センター海外日本語教師短期研修とソウル日本文化センターの上級日本語講座の2つであるため、ケルン日本文化会館の初級日本語講座の現場担当者の反応はコース途中段階での報告となる。また、地理的な条件から、自ずと日本語国際センター海外日本語教師短期研修の現場担当者の声は収集しやすい状況であったこともここで付言しておく。